

## 『罪と罰』における都市の構造

長編小説『罪と罰』（一八六六年）の中でペテルブルグがどのように描かれているかについては、これまでも多くの優れた考察があるが、本稿ではそれらを紹介し、またドストエーフスキイのペテルブルグ観の変遷にも目を配りながら文明論的な視点からこの問題を考えてみたい。既に『ペテルブルグの夢——詩と散文』（一八六一）において「もしわたしが偶然の雑録家ではなくて、ほんものの職業的なそれであつたら、わたしはウージエニ・シニューになり変つて、ペテルブルグの秘密を書こうと思うだろう」（一九一）（一九一68）と書いたドストエーフスキイは『罪と罰』においてそのペテルブルグの秘密を解こうとし、作品を通して人間と都市との関係を深く考えているのである。

だが、まず第一節で私達は人間の「根源的な存在構造」の「空間性」に注目し、「人間の自己」了解の型（2）（22）としての風土を指摘しながら「さまざまな国土における自然と文化の關係」（草案一五七頁）を分析し、かつ日本の都市の特殊性についても言及している和辻哲郎氏の名著『風土』を取り上げてドストエーフスキイの場合と比較しながら問題点を整理し、本論の方向性も確立しておきたい。

### 第一節 人間存在の空間性

和辻氏は風土の型をモンスーン・砂漠・牧場の三つの類型にわけ、各々の類型をさらに小さないくつかの種類にわけた。たとえば、「モンスーン域の人間の構造」は「受容的忍従的」であり「この構造を示すものが『湿潤』」であり、この地域では人間も又、風土も湿潤のもつ二つの側面（自然の恵み、自然の暴威）において自己を了解し、「神への關係はむしろ恵みに甘える關係であつて砂漠的な絶対服従ではない」（32）のである。一方、「ヨーロッパの風土は湿潤と乾燥との総合」（64）として規定され、ここでは「自然は一度人力の下にもたらされさえすれば適度の看護によつて、いつまでも従順に人間に服従している」（80）。

こうして氏は風土の三つの類型を描きわけることによつて文化の型をかかわいた観念性によつてではなく、具体的なイメージをもつて描きあげること成功した。さらに氏は後の『倫理学』において「かつては蒙古帝国の領土であつたロシア」のステップと「アメリカ」をも「風土の類型」に入れて五つの類型を立てた（248）。このような和辻氏の視野の広さは『歴史の研究』において、英国

高橋誠一郎

の歴史を振り返ることによって「理解可能な歴史研究の単位は国民国家」でも「人類全体」でもなく、「われわれが社会とよんできたところのある種の人間集団である」(32) (35)とし、今日存在する五つの「社会」を指摘したトインビーの鳥瞰的な視野の広さとする意味で拮抗するといっても過言ではないと思う。

だが氏の考案の対象が日本にしろられる時、確かに他の部分と同様にすぐれた記述であり、現象の中から本質的なアイデアを把握しているように見えるにもかかわらず細部において微妙なずれを生じており、その小さな亀裂の底は意外と深いようだ。

すなわち、氏は一方で日本の優れた文化的特徴として「しめやかな激情、戦鬨的な恬淡」といふとき日本的な『間柄』を家族的に実現している「『家』の意義を高く評価する(143)」。しかし、同時にヨーロッパでは電車等の交通機関が「町や人間に服従した家来」のように見えるのに反し、日本の町では左右の家並が「大名行列に対して土下座している平民ども」のように見えると指摘し、そこに「日本現代文明の錯雑不統一」(159)を見、「日本の社会の欧米化は」、「それがいかに顕著であっても、この『家』が頑強に都会の地に食いついて平べったく存している間は…それは根本的には、まだ過去の地盤を離れないのである」(166)と『家』の構造を鋭く批判しているのである。

ところでこの評価の間の亀裂、『家』に対する賞賛と批判の分裂は一体どこから生じたのだろうか。結論的に言えばそれは『風土』論の破綻を示すものではなく、むしろ氏の視野が、風土が人

間の文化に及ぼした影響を探る比較文化論の領域に留まらず、人間が自然をも支配の対象にしえるようになった近代西欧「文明」とその影響にまで及んでいるためと言えよう。言葉を変えれば、氏は「空間性」に注目して「人間の自己了解の型としての風土」を描きだすことに成功した。しかし「西欧近代文明」がまったく別種の環境を作りあげた都市については「文明論」的な視点から論じられねばならないのだろう。

では、ドストエーフスキイにおいてはどうかだったのか。ピョートル大帝によって作られたペテルブルグが最初から近代西欧を模範にしていたために、初めから「文明論」的な形で都市の問題と遭遇することになる。ただ、ドストエーフスキイのペテルブルグ観は一定のものではなく、シベリア流刑以前はペテルブルグに対して「埃と塵」などの否定的な面を指摘はしても、全体的には肯定的に対処していた。この時期のペテルブルグ観を表わしているのは、一八四七年に書かれた『ペテルブルグ年代記』の中の次のような一節だろう。

「ペテルブルグはロシアの目でもあり心臓でもある。筆者はわが市街の建築のことから始めた。この建築の性格の多様性さえ、思想の一致と運動の一致を証明しているのである。…中略…いまにいたってもペテルブルグは埃と塵にまみれており、いまだに建築中であり、作られつつある。その将来はまだ観念のなかにしかないが、しかし、その観念はピョートル一世に属し、それはペテルブルグの沼地にだけでなく、ロシア全土で、日一日と具現し、成

長し、根を張っていく」(十八—26)。

しかし、シベリア流刑を終え憧れの西欧への旅行でパリやロンドンに住む人々の悲惨な状態や極端な個人主義を見た後、彼のペテルブルグ観は激しく変化する。たとえば『地下生活者の手記』の主人公はヨーロッパの都市と比較する中でペテルブルグを「地球上でもっとも抽象的で人為的な都市である」(五—100)と規定するのである。

そして、『罪と罰』では登場人物のスヴェイドリガーイロフに「ペテルブルグでは、歩きながらひとり言をいう人がたくさんあります。こりゃ半気ちがいの町ですよ。もしわが国にはんどうの科学があったら、医者も、法律家も、哲学者も、それぞれ自分の専門に従って、ペテルブルグを対象にきわめて貴重な研究をすることができたでしょうよ。ペテルブルグほど人間の心に陰うつ険峻な奇怪な影響をあたえるところは、まずあまりありませんよ。気候の影響だけでも大したものですよ！ところが、これは全ロシアの政治的中心なので、その特性が万事に反射せざるをえません。」(六一—37)と語らせているのである。

ここでも「気候の影響」について述べているのが注目されるが、ドストエーフスキイにおいてもそれ程体系化されてはいないにせよ、人間の「根源的な存在構造」としての「空間性」は重視されていたと言っても過言ではないだろう。以下、この「空間性」に注目しながら『罪と罰』に描かれたペテルブルグの構造を分析してみたい。

## 第二節 土地なき人々の都市

『罪と罰』は次のような有名な文章で始まる。

「七月の初め、方図もなく暑い時分の夕方ちかく、ひとりの青年が、借家人から又借りしているS横丁の小部屋から通りへ出て、なんとなく思いきりわるそうにのろのろとK橋の方へ足を向けた」  
ラスコーリニコフは歩き始める。だが彼はまだ決心をしかねている。彼は高利貸しの老婆を殺して金を奪うことが解決策だと信じている一方で、それが「けがらわしい、きたない」行為であることも痛感していたのである。

V・コージノフは、冒頭の「借家人から又借りしている」小部屋という記述は「単に正確な情報であるばかりか、主人公のはなはだしい不安定さや根無し草性の象徴でもある」と書き、「彼には我が家がないだけではなく、自分たちも家を持たずアパートを借りている人から部屋を借りている」(4)と説明している。鋭い指摘である。ただ、このような「根無し草性」は単にラスコーリニコフだけを特徴付けるものではなく、ペテルブルグの多くの住民に係わるものでもあった。ラスコーリニコフが住んでいた小部屋は「高い五階家の屋根裏」にあったが、ドストエーフスキイは後に『作家の日記』で「それから、高さもやっぱり五階建てにしてもらおうじゃないか、借家人をうんと入れなくちゃならないんだからな」と言う言葉を紹介しながら、「アパートに建てられた恐ろしく高い(なによりも第一に高い)建物」は「おびたらしい

数」にのぼり、それは「人の話によると、ひどく壁が薄くて、建築費を節約したものだとのことである」(二二—107)と述べているのである。

ところで、ソーニャも「あなたも部屋を又借りしているとは知りませんでした」と語っているが、彼女の言葉は思想についても当てはまるように見える。ラズヰミーヒンは「自分一流のたためをいうのは、人まねで一つ覚えの真理を語るより、ほとんどまじなくらいです」と断言し、われわれは「他人の知識でお茶をにごすのが楽でいいものだから、すっかりそれになれっことになってしまった」(六一—155)と主張するが、このような思想の「又借り」については、一八七三年に書かれた『作家の日記』でペテルブルグの建物に関連して再び言及されている。ここでも『ペテルブルグ年代記』の記述と同様に「埃と暑熱、驚くばかりの臭気、掘り起こされた車道、改築中の家屋」などについて述べられているがそれに続く記述は全く異なっている。「建築の方面においてペテルブルグは、世界中のあらゆる時代のあらゆる建築の、あらゆる流行の反映である。何もかも漸次に取り入れられ、何もかもが自己流に歪曲されている。これらの建築を見ると、まるで本でも読んでいるように、ありとあらゆる思想や似而非思想の流入を読み取ることができる。その思想は正則的に、あるいは変則的に、ヨーロッパからわが国に舞い込んで、次第にわれわれ一同を征服し捕虜にしたのである」(二二—106—107)。

そして、一八七五年に書かれた『未成年』では主人公アルカー

デイはペテルブルグについて「だがこの霧が晴れたとしたらどうだろう……中略……昔ながらのフィンランド沼沢地を残して、煙のように消え去るのではないか」と感じ、また「誰もがあくせく急いでいる。だがことによるとこれは全部、誰かの夢なのではないか。ここにいる人間は一人として本物ではなく、動きも一つとして本当ではないのではないか」(十三—113)とも思っているのである。これは一見、過激な感想のようにも思えるが、しかし、ドストエーフスキイは既に一八六二年に「土地なくしては何ものも成長せず、いかなる成果も結ばない。すべての果実には自分の土地、自分の気候、自分の栽培法が必要である。足もとにしっかりした土地がなかったら、前方への運動は不可能である」(十九—148)と述べて、大地に根ざした生活の重要性を説いているのである。また、アルカーデイは自分の印象が個人的なものだと断っているが、レニングラードのドストエーフスキイの家博物館にある当時の新聞を見ると、そこには少し前の日本のサラ金広告のように高利貸の広告が紙面を埋めていたのである(5)。

確かに「人工的な都市」に、借家住まいに借金をし、借物の思想で暮らす人間ばかりが生活しているならばそこには真の生活はなく、このような危惧もきわめて当然の事と言わねばならないだろう。こうして、ドストエーフスキイはすでに冒頭で借りるといふ言葉や状況を意図的に何度も繰り返すことでラスコーリニコフという人物のみならずペテルブルグという都市の「根無し草」性を暗示し得ていると言えよう。

## 第三節 閑ざされた空間

グロスマンはドストエーフスキイが自分の意志に反して工兵学校に入ったが「造形美術の大規模な様式の学校とも言えるような建築史の講義は、『すばらしく』て、魅力があり、ドストエーフスキイに建築術に対する趣味とその法則を繊細に理解する力を永久に身につけさせることになった」のであり、それゆえ「(彼の)作品や手紙のなかには、建物やその『外容』と性質に関する深い考察が散見される」(6)と指摘しているが、このような考察は彼の処女作『貧しき人々』から見られる。賃貸の部屋は「まあ、まっ暗で不潔な長い廊下を想像してみて下さい。右手は窓一つない壁で、左手は戸口、戸口、戸口と、まるで宿屋のように一列に続いている。さて、そうした住いが別々に貸家になっているのですが、その中は何れもみな一部屋しかないのに、その一部屋に二人ずつも、三人ずつも住んでいるのです。秩序も何もあつたものじゃない」(1—16)と具体的に描写されている。

そして、『罪と罰』ではこのような個々の小部屋の形態がかなり詳しく述べられている。たとえば、ラスコーリニコフは「さもなくばくしくしげに自分の小部屋を見回した」がそれは「奥行き六歩ばかりの小っぱな檻でほうぼう壁から離れてぶらさがっているほこりまみれの、黄色い壁紙のために、いかにもみすばらしく見えた。その低いことといったら、少し背の高い人なら息がつまりそうな気がして、しじゅう今にも天井へ頭をぶつつけそうに思わ

れるほどだった」(六—25)と描かれている。ラスウミーヒンは「まるで船室だ。いつでもおでこをぶつつけちまうんだ。これでも住まいと称しているんだからなあ」(六—93)とこの小部屋について語り、ラスコーリニコフの母もまた「まるでお棺のようだね」と指摘し、「お前がそんな気鬱病になったのも、半分はこの部屋のせいだと思ふよ」(六—178)とこの小部屋がラスコーリニコフに与える影響を指摘している。しかし、「低い天井と狭い部屋というものは、魂も知性も押さえつけてしまうものなんだ」(六—320)とソーニャに語っているようにラスコーリニコフ自身もこの部屋が自分に与えた影響を熟知していたのである。

だが、ドストエーフスキイが描いているのは、ここでもラスコーリニコフの部屋ばかりではない。たとえばスヴィドリガイロフが最後に泊る部屋は「長い木造の黒ずんだ建物」の「ほとんどスヴィドリガイロフの背丈にもたらない、窓の一つしかない、小さな檻のような部屋」(六—388)であった。ソーニャの「いたって天井の低い部屋」は「なんとなく物置じみでいて、恐ろしく不ぞろいな四辺形をしていたが、それがこの部屋に一種不具的な感じを与えるのであった」(六—241)と記されている。また、マルメラードフが住むのは「奥行十歩ばかりの貧しい部屋」で、「マルメラードフはよその部屋の片すみではなく、別室を借りて住まっているわけだが、しかしその部屋は通り道になっていた」(六—22)のである。

ところで、『罪と罰』においては「敷居」など境界を表す言葉

が重要な働きをしていることが指摘されているが、私たちはここでドアの描写に注目したい。言うまでもなく、ドアとは部屋の内部と外部とを区切るものであり、外部すなわちホテルブルグの雰囲気と敏感に反応せざるを得ないのである。たとえば、ラスコーリニコフが金貸しの老婆の元を訪れ、ベルを鳴らした後の状況は次のように描かれている。「しばらくしてからドアがごくわずかだけ開かれて、そのすき間から女あるじがさもうさんくさそうに、客を見わたした。…中略…しかし踊り場に人が大勢いるのを見て安心したらしく、彼女はドアをすっきりあけた」。この場面でも老婆は「ごくわずかだけ開いたドア」の陰にいる危険な存在を予感し、怯えていたのであり、事実そこには「奥行き六歩ばかりの小っぽけな檻」から抜け出したばかりの青年が獲物を待ちかまえていたのだ。

ラスコーリニコフは酔っぱらった娘のあとを追い回す紳士を妨げようとして途中で止め「やつらはお互いに食い合うがいいさ」（六一—42）と呟いているが、ここでは近代社会を分析して自然状態のもとでは「人間は人間にとって狼である」と言ったホップスの言葉がびったり当てはまるだろう。一枚のドアの後ろにはどのような危険性が待ちかまえているかもしれないのである。

そして、ドアの後ろで待ちかまえているのはラスコーリニコフばかりではない。たとえば、自分の部屋を訪ねたラスコーリニコフにポルフィリーイは「ドアの向こうのわたしの住まい」に「思いがけない贈り物が用意されている」と言い、「逃げて行かない

ようにかぎをかけて締め込んだのです」と付け加える。「ラスコーリニコフはそのドアへ歩み寄り、あけようとしたが、ドアにはかぎがかかっていた」（六一—269）。また、スウィドリガイロフは入り組んだ又貸し住居の構造を利用して、ソーニヤの部屋のドアの後ろで彼女とラスコーリニコフとの話を立ち聞きし、それを利用してラスコーリニコフの妹ドーニヤを誘い出すのだ。こうして、空間の内と外とを区切りまた外部へと大きく導くはずのドアは、この小説においてはその外部あるいはその内部に危険な存在を予感させる象徴的な意味すらも担っているのである。

なお、「鍵はかけないのかい」というラズヅミーヒンの問いに対して、ラスコーリニコフは「一度もかけたことはないよ」と答え、さらに「鍵をかける必要のない人間は幸福ですね」（六一—186）とソーニヤに語りかけている。ラスコーリニコフのこの言葉は閉ざされた空間というこれまで見てきた事とは異なっているかに見える。しかし、彼の言葉を字句通りに捉えることはできない。それは密室でしか行えない彼女の職業を皮肉っぽく揶揄するだけでなく、密室で行ってしまった自分の行為にも係っているだろう。だが、マルメラードフの部屋の「小さなすすけたドア」もやはり「あけっ放しになっていた」と書かれていることを思い起こすならば、ラスコーリニコフの言葉は彼が自分の部屋に何ら価値のあるものを持ち得ず、部屋を大切に思っていないかったことを象徴的に物語っているように思える。登場人物の若者はホテルブルグには「おやじとおふくろのほかには、なんだってあらあー」（六一—133）

と語っているが、「なんでもそろっている」ペテルブルグの自分の部屋に彼は大切な物を持っていかなかったのである。

ところで、江川卓氏はラスコーリニコフの小部屋が「戸棚に似ていた」という例えがしばしば用いられるばかりでなく、「ついに彼は戸棚が大型トランクの中を思わせるこの黄色い小部屋が、息苦しく窮屈になった」とも記されていることに注意を促している。そして、この比喩が出口のなさを訴えるマルメラードフの言葉とも呼応していることを強調し、この比喩は「時代の閉塞感そのものさえも暗示している」(7)と指摘している。同じことはドアについても当てはまるようだ。すなわち、スヴィドリガーイロフの意図を知ったドーニャは、「両手でドアをゆすぶり、だれにともなく助けをもとめながら、ドア越しに」助けを求めるが、鍵の掛けられた密室に閉じ込められたことを知ってついにピストルを撃つのだ(六―380)。それは社会的な「出口のない状況」から殺人を思いついたラスコーリニコフの状況とも重なる部分があるだろう。そして、それは同じく密室でラスコーリニコフに殺された老婆の状況をも連想させるのだ。なぜならば、ドストエーフスキイは「以上二つの部屋が住まいの全部だった」(六―9)と書き、利子を天引きするほど強欲な老婆も豊かな生活は送っておらず、恐らく利子で生計を立てていくしか「出口」がなかったことを暗示しているからだ。

#### 第四節 地下室

ところで川端香里氏は、計画と自然の対立というペテルブルグのテーマは、ペテルブルグの壮麗さをたたえたと共に、洪水という「自然の猛威によって許婚者ペラーシヤを奪われた小役人エヴゲーニイ」の悲劇をも描いた『青銅の騎士』によって設定され、それはゴゴリやドストエーフスキイにおいても受け継がれていると述べている(8)。そして、自殺の前夜「雷が轟然と鳴り、雨が滝のように降る」なかを歩き回ったスヴィドリガーイロフを例にあげながら、ドストエーフスキイの作品においても川や、あふれる水、吹きすさぶ風雨などの自然はきわめて重要な役割を果たしていると指摘している(9)。

この指摘は大変重要だろう。その詳細な都市の描写の陰で、自然の描写はめだたない。しかし、自然は無視されているわけではないのだ。さらに、私たちはこのような荒々しい自然が、普通はみかげ石の堤防などによって嚴重に管理されていることに注目しておきたい。ネフの氾濫はいわば押さえつけられ、虐げられた自然の反乱とも言えるだろう。

そして、これまでも部屋の描写などを通して見てきたように、押さえられているのは「自然」だけではなく、「人間」もまたそうなのだ。阿部軍治氏はヨーロッパ旅行記『冬に記す夏の印象』に注目し、ドストエーフスキイがこの作品の中で、ヨーロッパの大衆の姿を「人間の真の宴席から追われ、見捨てられた地下

の中で、互いにぶつかり合ったり、押し合ったり」しながら、「真暗な地下室で窒息しないために出口を探している」と書いてることに注意をうながしている<sup>(10)</sup>。この箇所は、一見「地上の天国かと思われる」ような「理想を実現した」ヨーロッパ近代文明が、同時に生み出したその影を、ドストエーフスキイがいかに観察していたかを明確に物語っていると思える。そして、この意味では屋根裏部屋に住むラスコーリニコフもまた、地下室に押し込められた一人であろう。ペレヴェルゼフはその著『ドストエーフスキイの創造』において「分裂」のテーマとその発展を詳しく追いつながら、ラスコーリニコフの「非凡人」の理論や彼の精神の二重性に触れて、「彼の社会的見解が形成されたのは都市の片隅の狭い小部屋の中、魂と頭脳を圧迫する低い天井の下においてだった」<sup>(11)</sup>と主張している。S・ペローフも貧民たちの集まるセンナヤ広場の雑踏とネワ川の壮麗なパノラマを対置しながら確認しているように、ラスコーリニコフも又「彼を生み出したペテルブルグのように分裂している」<sup>(12)</sup>のである。

一方、江川氏は「ロシアの地獄譚では、焦熱と悪臭こそが、地獄の責道具の主流をなしている」ことを紹介しながら「通りへ出て、まるで通風窓のない部屋の中にいるみたいだ」というラスコーリニコフの母親の言葉や、通りの「うだるような暑さ」や「独特の悪臭」の描写を引用して、「ピョートル大帝が沼地の上に『人為的』に築いた」ヨーロッパ的な町ペテルブルグは小説の中で地獄にすら例えられていると指摘している<sup>(13)</sup>。このよう

な氏の指摘は一見、奇抜な考えのようにも見えるが、アカデミー版全集の註も流刑にあっていた「四年間」を「生きながら葬られ、棺を閉じられた」と感じていたというドストエーフスキイの手紙を引き、さらにソーニャが「墓に入って四日」という箇所を強調していることにも注目して「ドストエーフスキイによって強調されたラザロの『四日間』は、ラスコーリニコフの状態をも象徴している」<sup>(14)</sup>と書いている。そして、ドストエーフスキイ自身もすでに一八四六年の手紙で「ペテルブルグは僕にとって地獄です」<sup>(15)</sup>と書いていたのである。

## 第五節 都市との和解

ところで、シクロフスキイはペテルブルグに対するラスコーリニコフの憎しみに注目しながら、「殺人についての強迫観念は、ラスコーリニコフにとっては都市と結びついていた」と記し、また「敵としての都市」は「フリーエ主義者の基本的概念の一つであり、ドストエーフスキイはそれをよく知っていて『罪と罰』のなかで具体化したのだった」<sup>(16)</sup>と述べている。このことは、ドストエーフスキイが小説の中で注意を払っているペテルブルグの火事の頻発とも無関係ではない筈である。ドストエーフスキイ兄弟が発行する雑誌『時』も既に一八六二年に火事の事を取り上げ、「ペテルブルグで始まった火事はその後、ロシアの様々な田舎にも飛び火した」<sup>(17)</sup>と書いているが、ドストエーフスキイが放火のためと考えていたこのような火事は、ラスコーリニ



コフの犯行とも通じるものがあるように思える(15)。つまり、ラスコーリニコフは自分の行く手をはばむ「敵」である老婆を殺したが、放火犯は「敵である建物」を破壊するのである。

ただ、高利貸の老婆が住む「恐ろしく大きな建物」には出入りのものがうるさいほど往き来する「二ヶ所の門」があり、また「門からすぐ右」には「暗くて狭い『裏梯子』」(六—七)があったが、都市を憎んでいたはずのラスコーリニコフは、その都市や建物の構造を「もう万事心得て研究しつくして」犯罪に踏み切ってもいるのだ。シクロフスキイの言葉を受けて清水孝純氏が述べているように、都会の中で「人間の心は知らず知らずその磁場によって歪められてゆき、しかも気がつかない」のであり、ラスコーリニコフが「幻想都市ペテルブルグの魔力から逃れるのは、シベリアにいったから」(16)なのである。ラスコーリニコフの甦生が起きた暖かい日の朝をドストエーフスキイは次のように描いている。「(ラスコーリニコフは)丸太に腰をおろし、荒涼とした広い大河をながめ始めた。高い岸からは、ひろびろとした周囲の眺望がひらけた」(六—11)。狭い閉ざされた空間では人の心も「自由」にはなれないのであり、シベリアは単にペテルブルグから離れているからだけではなく、その犯されていけない「自然」や「空間的な広がり」の点でもラスコーリニコフに対して影響力を持っていたように見える。

ただ、ラスコーリニコフをたんなる破壊者ととらえることはできない。「ユスーポフ公園のそばを通りかかったとき」なぜかラ

スコーリニコフの頭に都市計画の案が浮かぶが、それは改革者としてのラスコーリニコフの一面を的確に物語っているだろう。すなわち、このとき彼は「あらゆる広場広場に高い噴水を設けたらいかばかり空気をさわやかにすることかと考えて、その着想に没頭しかけたくらいだった」し、さらには「夏の園」を拡張して節の公園と合併したら、「街のためにきわめてりっぱな、きわめて有益なことだろう」(六—60)とも考えていたのである。この一節には絶望した改革者ラスコーリニコフの都市への思いが如実に表れているように思われる。ここでラスコーリニコフは「焦熱」をやわらげ、分裂した都市の機能を統一することを夢見ているのである。

この点で興味深いのは「緑の色と清浄な空気は」かならず「肉体に生理的变化をもたらして」、興奮や夢も変ったものになり「たぶん今よりも楽になるかもしれない」(八—31)とマイシユキンが語ったと言う『白痴』の登場人物イポリートの証言である。ドストエーフスキイは後に「ペテルブルグに残った人たちのために、新鮮な空気を『呼吸する』ことのできる公園や娯楽場がいくつも開かれたという」(二—108)と『作家の日記』に記すが、このことはラスコーリニコフの夢想がドストエーフスキイの関心とも重なっていたことを物語るものだろう。しかも、現在は地球の温暖化が問題になっているが、『罪と罰』で気候の及ぼす影響について述べたドストエーフスキイは、木々の気候に与える影響についても「森林がどんどん伐採されて影をひそめるおかげで、ロシア

の気候はまるっきり別なものになろうとしています。水分を保持するところがなくなり、どこにも風をふせいでくれるものはありません」(三十・一—72)(19)と手紙の中でも記しているのだ。

以上、『罪と罰』に描かれたペテルブルグの構造を概観したが、当時の高利貸しの横行は一時期のサラ金や頻発したサラマン金融殺人事件を連想させるし、ラスコーリニコフの都市計画についての夢想は、幻に終わった東京の都市計画を思い起させる。NHKの報道番組「土地はだれのものか」によればロンドンには市街地を取り囲んでその幅が一九キロから二四キロに及ぶ帯状の緑地帯があり市民たちのいこいの地となっているが、実は東京にも戦後実現せずには終わった同じような計画があったのだ。今、一九世紀のペテルブルグを描いた『罪と罰』を読む私達はそのあまりの住宅環境のひどさに呆然とする。しかし現代の東京の航空写真をみた一ロンドン市民は「こんなむちゃな開発が許されているとは…痛ましい…あまりにも痛ましい…」とつぶやくのだ。ドストエーフスキイはペテルブルグを「十九世紀で最も抽象的で人工的な都市だ」と記したが、首都の土地の上下を高速道路と地下鉄が縦横に走る東京も「二十世紀で最も抽象的で人工的な都市だ」と言えなくはないようだ。さらに、ドストエーフスキイは既に『貧しき人々』において「金のある人たちは貧乏人がはかない運命を訴える声を聞くのが嫌いなのです」(一—88)と記し、この小説を通してペテルブルグに住む庶民の物質的に貧しい生活と共に金持ちたちの精神的な貧しさをも描き出した。今、東京にはこの小説や

『罪と罰』に描かれたような貧富の地域差はほとんどなく、「土下座しているような」家並みも少なくなった。それは日本が豊かになったためであるが、その一方で日本は貧しい外国人労働者が働くのを制限しており、また日本の「金」は私たちの見えないところでほかの国の森林を裸にしているという。こうして目を世界にまで広げる時、後のラスコーリニコフにもつながるチェーヴンキンの批判は富める国の住民となった私たち日本人にもあてはまるようだ。ドストエーフスキイが鋭く洞察した都市と人間との係わりは現代に生きる私たちとも無縁のものではないように思える。

完

## 註

- (1) Ф. М. Достоевский, Полное собрание сочинений в 30 томах. Ленинград, Наука を用いた。全集の訳は原則として米川正夫氏の訳に従ったが、一部に改変して用いさせて頂いた箇所がある。なお、引用頁数は原文の頁を示したが、ローマ数字は巻数を、アラビア数字は頁数を表す。

- (2) 和辻哲郎、『風土——人間学的考察』、昭和十年、岩波書店、なお、括弧内は頁数を表す。

- (3) A. L. トインビー、『歴史の研究 I』、社会思想社、長谷川松治訳、三五頁。

- (4) В. В. Кожин, 《Преступление и наказание》 Достоевского — В кн.: Три шедевра русской классики. Москва, 《Худож. лит.》, 1971. стр. 121
- (5) см. Литературно-мемориальный музей Ф. М. Достоевского, Ленинград, Лениздат, 1981, стр. 74.
- (6) Гроссман, 『ドストエフスキイ』、北垣信行訳、筑摩書房、一九六六年、二〇頁。
- (7) 江川卓、『謎と奇』『罪と罰』、新潮選書、一九八六年、六二～六三頁。
- (8) 川端香男里、『薔薇と十字架——ロシア文学の世界』、青土社、一九八一年六三～七三頁。
- (9) 同右、六九～七五頁。
- (10) 安部軍治、『地下室人からラスコーリニコフへ』、『理想五号』一九七九年、七三頁。
- (11) Переверзев, “Творчество Достоевского”, Госиздат, Москва, 1922. Грентльбен著、『ドストエフスキイの創造』、長瀬隆訳、みすず書房、一九八九年、一一三頁。
- (12) С. В. Белов, “Роман Ф. М. Достоевского 《Преступление и наказание》—комментарий”, Ленинград, Просвещение, 1979, стр. 27.
- (13) 江川卓、前掲書、八～九八頁。
- (14) シクロフスキー、『ドストエフスキー論——肯定と否定』、勁草書房、一九六六年、水野忠夫訳、二九四頁。
- (15) 中村健之介氏はこれらの火事の多くは単に木造建築とろろそくにより発生したと指摘しているが、こちらのほうが事実に近いだろう。『ロシア文学のなかのヘルツブルグ』、友好文化会館編、七〇頁。
- (16) 清水孝純、『ドストエフスキー・ノート——『罪と罰』の世界』九州大学出版会、一九八一年、二九四～二九五頁。
- (17) 訳は小沼氏のを引用した。小沼文彦編訳、『ドストエフスキー 箴言と省察』、教文館、一九八五年、二〇〇頁。なお、同様の見解については全集の註(三十・一—297に詳しい説明がある。